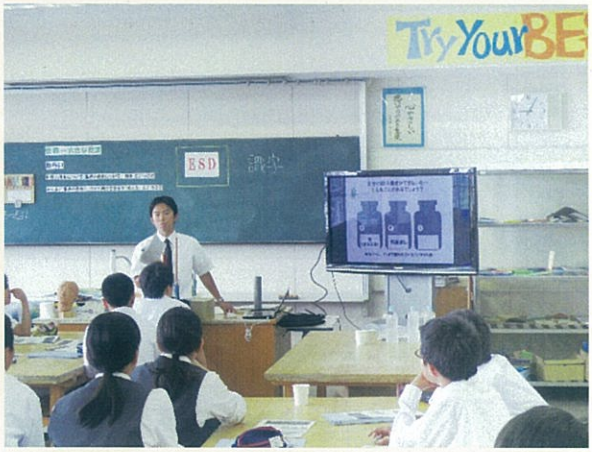
平成28年度 社団法人 埼玉県校外教育協会委嘱

研究主題

# 地球規模で考え足もとから行動を

## ESD（持続可能な開発のための教育）を生かした生徒の育成




さいたま市立 大宮八幡中学校

## 校外教育とESD（持続可能な開発のための教育）

本校では平成27、28年度さいたま市よりＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）の研究委嘱を受けて活動している。そこで、「地域・環境・人権」と「国際理解・多文化共生」に視点を当てた活動を推進してきた。中でも地域とのかかわりの大切さを主眼においた活動や、環境教育の視点から学校ファームの活動に力を入れている。これらの活動を校外教育並びにＥＳＤの観点からまとめることで、地域との絆を一層深めるとともに、地球規模の課題（地球温暖化、大気汚染、生物多様性の減退等の環境問題、貧困・紛争・人権等の社会問題）を、生徒自身が自分のこととして捉え、50年後100年後の人たちも、今の私たちと同じ状況下での生活ができるようにするには、どのようなことに気をつければよいのか、中学生として今何をなすべきか、身近なことから、そして全教科、領域等を通し、気付き、考え、行動する事の出来る生徒の育成を目指した。更にこれらの活動を通し、自己の存在が大切なものであることに気付かせ、自己肯定感の高まりを期待し、本研究に取り組んだ。

**○研究の仮説**

- 生徒に、いろいろな体験活動を通しＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）の概念を身につけさせると、地球規模の課題を身近なこととしてとらえることができる。
- 八幡ファームの活動を通して作物を育てることで、自らの地域で育てた食物を自ら食す「地産地消」「フードマイレージ」の考えを学ぶことができる。
- 地域との連携活動を推進することで自分の生まれ育った地域に対する愛情がはぐくまれる。
- 国際理解の活動を進めることで、身近なところにもある多文化共生社会について気が付くことができる。

## 八幡（学校）ファーム

**○研究の具体的な方策**

- 「ハンガーマップ」を使い、世界の現実と日本を含む先進国のおかれている状況について学習しフードマイレージを低くすることが地球環境のためになることを学ぶ。
- 学区内にある種苗店の協力や地域の方の指導を得た八幡ファームでの栽培活動を推進する。
- 地球に負担をかけている輸入品の多さについて学習し、地産地消の大切さを学習する中で、ジャガイモ、トマト、キュウリ、ナス、大根、ネギ、白菜、カリフラワー等を季節に応じて栽培する。

## 地域とのつながり

**○研究の具体的な方策**

・学区内の社会教育施設である五反田会館は、例年「生徒のボランティア活動の受け入れ」「代表クラスの合唱」「職員研修の実施」等を行っており、本校との関わりも深い施設である。そのため利用者のために、学校で育てたビオラを継続的に寄付し育てていただいている。

・各学年で取り組んだ「地域清掃ボランティア」では、地域コーディネーターの協力もあり、広い範囲の清掃活動を行った。

・大宮八幡中で開かれる「敬老のつどい」への生徒の参加。昨年度は吹奏楽部演奏と剣道部の演舞を実施し、地域との関わりを深めた。

五反田会館とのつながり

地域清掃ボランティア

敬老のつどい

## 国際理解・多文化共生

**○研究の具体的な方策**

**・世界一大きな授業の取り組み**

世界の教育の現状について世界中で同時期に学び、教育の大切さについて考えるイベントに参加し、世界の現状を知る。特に識字率の向上や教育費の不足をどうすれば解消できるかを考えた。だれもが教育を受けられるようにするには何が必要か、どう行動することが大切かを考えることができた。この活動をきっかけとして「世界の果ての通学路」を全校で視聴し世界の現実を理解することができた。

**・JICA（国際協力機構）「世界の笑顔のために」への協力**

使わなくなった鍵盤ハーモニカや、算数セット、縄跳びや絵本などを地域や生徒から集め、JICAに送る活動通し、世界の現実を知るとともに、青年海外協力隊員などから日本の国際貢献の生の声を聴き、中学生として何ができるのかを考えるきっかけとする。現地協力隊員からの手紙やメールを通し世界を身近に感じることと社会に貢献している実感をはぐくむことができた。

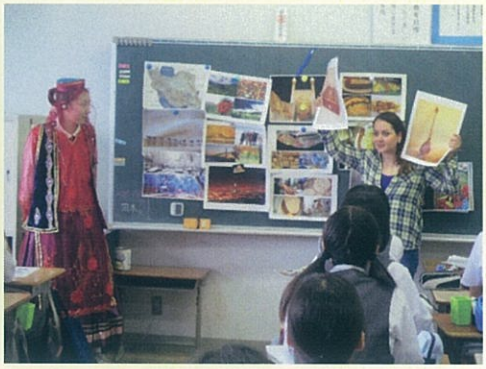
### ・「届けよう服のチカラ」プロジェクトへの参加

学区内にある衣料品メーカーの、子供服を回収し難民を支援する社会貢献活動に参加協力した。講師を招き、全校集会でこの活動の重要性を知らせ、回収方法や参加の方法などを校内で周知する。生徒会を中心に、ボランティア意識の高い生徒を集め、ポスター作製、地域の社会教育施設への呼びかけ等を行った。休日開催のイベントに参加させていただき回収した。回収した子供服は３５００着を越え段ボール箱４０箱以上を寄付することができた。

### ・ブルキナファソ視察団の来校

JICA（国際協力機構）と埼玉大学、さいたま市教育委員会等が主催するブルキナファソ国の教育視察団を受け入れることで、生徒の多文化共生意識の向上と国際理解の推進を図った。全校での交流会や各学級での給食試食などを通し交流を深めるとともに保護者や地域にも広報し、当日の活動を参観していただき、これらの活動が地元のケーブルTVにも放映された。

### ・国際理解支援協会の「留学生が先生」を活用した国際理解教育



「留学生が先生」プログラムを活用し、３年生の各学級に留学生を招聘する。それぞれの国(ブラジル・スリランカ・イラン)についての歴史、言語、食、地理、環境、日本とのかかわり、について事前学習を行い、留学生の前で発表する。留学生から事前学習についての話を聞き、自国文化の素晴らしさと日本の良さについての話を聞く。

## 成果と課題

（１）成果

①自分たちの活動が、世界とつながっていることに気付く生徒が増えた。

②身近なことを大切にする事が、実は地球規模の変化に対応していることに気付くことができた。

③地域や保護者の方の支援や協力が、生徒たちの意欲を引き出していた。

④地域や保護者の方の学校への理解、協力がより深まった。

（２）課題

①さらに多くの生徒がかかわる活動にしていく工夫が必要である。

②生徒会活動や委員会活動と総合的な学習の時間や特別活動の活動時間とのすみわけと時間の確保の工夫がより必要である。